

どんぐり牧場での ワークキャンプをふりかえって

福山 清蔵

この夏かねてより念願であった「どんぐり牧場」に学生たちと「フィールドスタディ」（コミュニティ福祉学部専門基幹科目）の1プログラムとして参加できた。

「牧場」という名前から想像していたところとは随分と違っていた。そこは「山道」の突き当たりであり、山間の「傾斜地」であった。そこに生活しておられる方々は8名と聞く、いわば、「小規模作業所」もしくは「グループホーム」とでも呼ぶのだろうか。農業・養鶏を主体とした共同生活を行い、「施設長」の「横山氏」家族は「知的障害者」であるメンバーと共に暮らしている。

このどんぐり牧場は本学チャペル団体BSAが30年近く関わって来ている場所でもある。そして「横山氏」の父親は「賀川豊彦」と一緒に活動しておられた熱心なクリスチャンである。その思想的感化の元で育った横山氏は、「滝野川学園」の指導員を辞してどんぐり牧場を開設することにしたが、「顔と性格と協同性」が発揮される人数として7～9人の人と一緒に組み立

てることができる生活を目指したという。もっと参加希望者が増えたら「もう一つのどんぐり牧場」を作るしかないともいう。

I Q30～50位の障害者と聞くとき、それまで私が経験からイメージしていた人々とはかなり違っていたことが印象的であった。このように「生き生きと」「障害者」が生活している場所を私は多くは知らない。多くの施設では「呆然と」「ふわふわ」と「漂いながら」「受け身」で暮らしている。しかしこの方たちは違っていた。この驚きから私は離れられなくなっていた。

確かにここどんぐり牧場には「身体障害」を伴った人や「高度自閉」の人などは生活を共にしていない。その意味では比較的適応度はよいのかもしれないが、そのことでどんぐり牧場の評価は決して下がるものではない。むしろ、このような農作業と共同生活を通じて、障害者の生活自立への挑戦的な試みと捉えることがふさわしい。どこの施設でもどのような障害にもこのような仕組みが適応できるわけでも無いにしても、ここで生活している人々の

「眼の光」がどこから来ているのかを確かめる意義は大きいと考える。

「どんぐり牧場はなぜ山の奥まったところにあるのか」学生たちは率直に疑問をもち、「なぜ、地域の中にできないのか」と考える。障害者のおかれている現実、そして「養鶏」に伴う「臭害」「騒音」、また「野菜などの収穫のための農地」、そして「生活のリズム」の確立などいくつかの視点が必要となってくる。福祉施設がたいていの場合地域社会にとって「迷惑施設」と思われ続けた歴史が目の前にも横たわっている。しかし、農業をするにはここが良い。

皆で朝の6時から夕方6時頃まで働き、一緒に食事を取り、同じ風呂に入り、一緒にテーブルでトランプをする。こんなささいな事がさりげなくここにあるということがじつはとても大きなことである。「農業」という仕事・働きが多くのことを作り出しているのだということにも時間の経過の中で気づいた。植え、育て、収穫し、調理し、食す、このサイクルの中で人々は真に「全人的に自分であり続ける」ということの発見でもあった。農業を展開するには計画、判断、調整、協同といった諸能力が求められている。また、畑仕事は全身活動でもある。こうした「農業」を中心とした営みがもたらしている全人性の回復がどんぐり牧場の意味なのだと思う。

学生たちは炎天下によく働いた。早起きし、遅くまで語らい、そして色々

なことを感じていたようだ。もちろんここでの出来事の一つ一つがカルチャーショックであったろう。

朝6時には畑に行き仕事が始まり、8時にいったん上がり朝食となる。そして10時からまた昼までの仕事となる。学生は2泊3日ずつであったが、私は3班に分けた関係もあり5泊6日の滞在となった。その分学生たちより多くのことを感じるゆとりがあったようである。

第一班の学生が最初に漏らした言葉は「ここには自販機が無いじゃないか」「あれー、参ったなー、ここ携帯が入らない」であった。その意味で全く日常の便利さや快適さ、そして反対にここでの不自由さが対照的であった。しかしそれらに「よく耐えていた」。何しろ自分の好きなときに水も飲めないし、コーヒーも音楽も無い生活であったから。そこからキャンプの生活が始まったけれど、とうとうある場所まで行くと携帯電話が繋がることが懸命な努力と試行錯誤によって発見された。どんぐりで生活して入る方達との間にも同じように「つながる」ことがさまざまに試みられていたし、それなりにはつながれたと思う。

畑仕事を一緒にしていると当然のことであるが彼らはその仕事について「ベテラン」であり、逐一彼らの指示を受けることとなる。その采配ぶりは丁寧で親切である。むしろ自分たちの仕事に対して「誇り」「自信」を持っていることが言外にも伝わってくる。

「横山氏」の話聞き、夜のミーティングで語り合い、自分のテーマでレポートにまとめることを通して学生たちにも「力強さ」が見えてきている。

「書物で分かったこと」「体験してかわかって分かったこと」この双方向のたゆまぬ運動が学生たちをたしかなものに導いてくれるのだと信じている。

以下に3人の学生のレポートを紹介するのでキャンプ、そしてどんぐり牧場の一端を感じ取っていただければ幸いである。

私たちのために「特別の仕事」をアレンジしてくれたり、その仕事を最後の班で完成させるように手配をしてもらったりとボランティアのつもりがかえって気を使わせてしまったことに心が痛むが、このような心意気が学生とのつながりを支えたのだらうと思われた。どんぐり牧場のたくさんの配慮と好意とに感謝しつつ…

(ふくやま せいぞう)

本学コミュニティ福祉学部教授)

<学生レポート1>

ワークキャンプ (in どんぐり牧場) を通して

コミュニティ福祉学部
2年 相原 耕平

今回、フィールドスタディで夏休みにどんぐり牧場へと行ったわけだが、そこでは普段出来ないような様々な経験をすることが出来たと思う。それまでちょっとしたボランティアの経験しかなくワークキャンプなどやったこともない私にとって、この3日間はなかなか刺激的なものだった。ここでは、どんぐり牧場で得たもの・かんじたものをもう少し深く掘り下げてみることにする。それによって、そこでの経験をより確かな形に出来ればと考えている。

どんぐり牧場に行ってから考えたこと

私はどんぐり牧場を、農業による共生集団だと捉えた。それは、その方達が各自の能力を出し合って、一緒になって生活を営んでいるように見えたからである。都会の生活に比べれば、決して楽とは言えない。しかし、私は(3日間ではあるが)実際にそこでの生活を体験してみて、言いようのない充実感を覚えた。自分のしていることが他の人たちの役に立っているという一種の満足感があって、何と言うのか、都会の生活よりも無為なことが少ない自分が生きているということを実感し